
甘くて苦い少女たち

戸塚夢葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘くて苦い少女たち

【Nコード】

N6464Z

【作者名】

戸塚夢葉

【あらすじ】

普通の学園生活を望む、霧谷和也。しかし、その周りの女子のせいで現実以上の甘い日々を送ることになる。和也の事が好きになってしまう人が増え、和也は誰と付き合うのか？

いつも通りの日々……のはずが!?

高校入学して1ヶ月。

ここまでは普通の人生。

オレ、霧谷和也の人生はここから桃色、否、黒色に変わっていった。他の、思春期の高校生ならこれを見て羨ましがらるだろう。

人の気も知らないで、と思う。

オレは、普通の暮らしがしたい。

金持ちでもなく、貧乏でもなく、ごくごく普通の一般家庭にあこがれる。と言っても、まだまだ先の話だが……

「今日も生きていられるかな……」

高校生の発する言葉じゃないことは十分わかる。

だが、心配なのだ。

ほら、また遠くから悪魔の怒声が聞こえる。

「コラー……!!カズ……いつまで寝てんの!?!」

うるさいなあ、と呟き家を出る。

「今日も、朝っぱらから無駄に元気の多いことで」

言った瞬間、鳩尾にパンチが飛ぶ。

ぐふっ、と吐いた。

「ったく、無駄とはどーゆ事!?無駄とは!」

「そうか、無駄という言葉の意味も知らないか、だったら辞書を開き……」続きを言おうとしたら殴られた。

「死んで生き返れ」

酷い言葉だ。

今日も生きていられますように……

地面に這いずりながら神様に願う。

そもそも、可愛い顔してこんなことを言うなんて、外見と内面の差がありすぎる。そのことを知っているオレは、この幼馴染の少女、柏木優奈に対して、恐ろしい、怖いなどの黒い感情を抱く。しかし、

この内面を知らない馬鹿共は、可愛い、好きなどという命知らずの感情を抱く。

学校に間に合うために少し早歩きをする。

オレが通っている、帝都学園では俺らは付き合っているということになっていた。必死に説明してようやく、噂が収まり、普通の学園生活を送れそうだ。

あのかきは酷かった。オレも被害者なのに、殴るところか蹴られてしまった。死ぬかと思ったよ。

一緒に登校は、なんか普通って感じ。

幼馴染だから、別になんとも思わないし。

今日は、一緒に登校はしてない。なぜなら、さっき殴られ、地面を這いずってる間に行ってしまったからだ。

校門を過ぎ、教室に入った。

ここでまた悪夢が訪れる。

いつも通りの日々……のはずが!?

ガラガラガラとドアを開けると、目の前に汚い泣き崩れた顔が近づいてくる。

「おわっ!なんだなんだ!?!」

そう言ったのが聞こえたのかどうかわからなかった。

「和也ー」

泣きながらオレの名前を呼ぶ。

こいつは、鈴木祐樹。

オレの数少ない親友だ。

なにしろ、学園のアイドルらしい優奈と仲がよく幼馴染という位置のオレは恨まれることのほうが多かった。

祐樹の場合、ネットの中で生きているので嫉妬心というのは微塵もなかった。

その祐樹が泣き崩れている。特に珍しくもないが一応聞いてみた。

「どうしたんだよ?まずは鼻を拭け」

そう言っつてハンカチを渡した。このハンカチは二度と使えないな……

……

それから少しして、口を開いてくれた。

「朝にね、お前の幼馴染の柏木に、『オイ!お前の彼氏の和也君はどうしたのかなあ?』って言った瞬間に顔面にね、拳が飛んできたの」

そうか、自業自得だ。

助ける気など埃の様に去った。

その直後、後ろから鬼を纏った少女が来た。

もちろん星奈である。

「アンタ、こいつにどーゆーしつけしてんのよッ!ちょうどいいわ。アンタら二人とも……」

言い終える前に俺たちは教室から出て行った。

もちろん、速攻で捕まりボコボコに．．．
朝から体力が消えた。

当分、星奈の怒りは消えそうにない。

そして、また祐樹が命知らずな事を言った。

「アイツのスカートの中盗撮してくる」

知らんぞ、とだけ言っつて祐樹を見送った。

見たいわけじゃないよ？いや、思春期だし．．．見たいかなあゝ
そんなことを考えているうちに、祐樹が携帯を取り出す。

机の陰に隠れ、シャッター音を鳴らす。

バカだな．．．

光と音出てるよ。

当然、その直後に祐樹はボッコボコ。

享年十五歳。

ご愁傷様で。

それだけならよかった。

優奈がオレのほうに向かってくる。

「ゆ、優奈．．．？」

聞こうともせず、腹にフック、顎にアッパーそしてとどめに踵落とし。

死亡時刻 午前八時二十五分。

それから、オレは気を失い、気づいたら保健室のベッドの上だった。

「お目覚めですか？」

傍から優しい声が聞こえた。

誰だろう？

起き上がって見ると、そこには黒い髪の綺麗な人がいた。

いつも通りの日々……のはずが!?

起き上がるとそこには黒い髪で長くストレートの女子がいた。

「ここはどこだ?」

辺りを見回しているオレに声をかけてくれた。

「保健室ですよ。大丈夫?」

心配されていた。

そういえばオレは、優奈に殴られ気絶して……ってことはずっとここに!?

「あの、今何時……ですか?」

ふふっ、っと笑ってその子が答えてくれた。

「もう4時ですよ」

ここにこしながら答えた。

4時……ってオレは朝からずっと寝てたのか!?

情けねーと思いつつ、起き上がる。

そして、今更だがオレを手当てしてくれた人にお礼を言った。

「あの、ありがとうございます。失礼ですけどお名前は……?」

にこやかなまま答えられた。

「私は、櫻井紫苑。2・3です。」

へえー2年なのかぁとオレは言った。

「に、2年!?!」

驚いたオレはすぐさま謝った。

「すみません!2年生とは知らず、失礼を……」

「いいんですよ。すぐに言わなかった私にも非はあります」

なんていい人なんだ。星奈とは大違いだ。

にしても、情けない。

女の攻撃で約8時間も気絶するとは……

今すぐ、家に帰ろう。

「あの、ありがとうございました。帰ります」
そう言つて、保健室を出た。
お大事に、と紫苑先輩は言ってくれた。
優しすぎる先輩、この出会い方はまさに2次元世界!!!
若干、興奮したがすぐに溜息とともに消え去つた。

校門の前に優奈が立っていた。

「遅い！いつまで待たせるつもり!?」
顔を赤くして後ろを向きそう言つた。

「お前がそうしたんだろ」
地雷を踏んだ。

「アンタが弱すぎんのよ!!!」
やばい、と思つてすぐに謝りお礼を言つた。

「悪かつたよ。でも待つててくれてありがとう」
ん？優奈が耳の後ろまで赤くなつてるぞ？

女というものはよくわからない。

「そ、そんなことより！早く行きましょ！バイトしなきゃ」
そう、オレの家はパン屋だつた。

一見、地味そうに見えるがかなり難しい。

わけあつて、優奈がバイトとして手伝つてくれるのだ。

店の名前は、「ベーカリーブレッド」

なんか、めっちゃくちゃだつた。

そりゃそうだ。だつてオレの姉貴が付けたんだもん。

店の前に着きドアを開けると、いきなり視界に巨乳が……

「遅かつたな」

いきなり目の前に現れた。

「おわっ！」

「おわっ！とは何だ！人の顔を見るなり！」

そういうわけじゃないよ姉さん。いきなり現れたからしょうがない
つて。

「おお！優奈君。来てたのか。入りたまえ」
お邪魔します、と言って優奈が入った。

いつも通りの日々……のはずが!?

黒くて長く真っ直ぐな髪。男勝りな口調、性格、そして……この巨乳。間違いないくオレの姉さん霧谷遙だ。これだけはいつも変わらないのでほっとする。

姉さんはパンを焼くことだけは一流だが、この店の名前のせいで随分損をしている。しかし、変えるつもりは毛頭ないらしく、仕方なく今のままで続けている。

「何をしてたのだ? いつもならもつと早い筈だ。」

「どうやらオレ達が遅いことに腹を立ててるらしい。」

そんなことを考えているうちに優奈が口を開いた。

「ずっと気絶してたんですよ。」

「はあ、と溜息をつきながら言った。」

「あれは、お前が悪いんだろ!」

優奈は赤くなりさらに反論してくる。

「アンタが弱いんですよ!」

「お前が強すぎんだよ! このゴリラ!!!」

ゴリラという単語を聞いたとき、一瞬にしてオレの急所に膝蹴りが

「ぐほおっ!」

本日3度目の死の危険性。

そして、お決まりの台詞。

「死んで生き返れ」

冷酷無比な奴だ。

もめていたオレ達を、姉さんが止めてくれた。

「まあまあ、よさないか。仲がいいのはわかったから。まるで夫婦みたいだな」

この一言がさらにオレを突き落とす。

ふふっ、と笑ってどこかへ去って行ってしまった。

「そ、そ、そ、そそそ、そんなんじゃないです!!!」
顔が真っ赤になりながら、俺に向かって拳を振るう。

何故だ……オレは悪くないのに。

なんとか生き返り、やっとバイトを始められる。

「遙姉さん。そろそろ店やばいよ？ずっと赤字で倒産すんぜんだよ」
そう、現に優奈のバイト代でさえ払えていなかった。いつでもいい
とは言ってくれているがさすがに申し訳ない。

最近では、パンの種類が同じだから客が減り姉さん目当てや優奈目
当ての客ばかり来る。それでおまけに買っていく、という感じで少
しだけ売れる。

それだけだから当然赤字だった。

「ふむ……なら新商品を開発するか」

おおっ、とオレは反射的に言った。ここまで真剣になってくれたの
は久しぶりだ。ついこないだまで、ずっと家でネットしかしてな
かったから。姉さんはネットオタクだ。だから祐樹とも気が合う。

ずっと黙り込んでいた優奈がやっと口を開いた。

「季節の商品を入れたほうが売れると思うわよ」

さすが、優奈というところだろう。真剣に考えてくれてるだけでも
ありがたい。

「では、新商品を今月中に最低3個作る。一人1個アイデアを持っ
て来い。」

新商品についての会議が終わり、いつも作るパンに取り掛かった。

いつも通りの日々……のはずが!?

午前9時55分。

やっと作業が終った。

パン作るなんて1週間ぶりくらいでこれからはしっかり作ろうと思う。でないと、姉さんはネットゲーのために店まで閉めかねないからだ。

姉さんの人生はゲームとパンでできている気がする。誰か見張り役がほしい。そろそろ真面目に店がやばいのだ。

「いい姉さん。これからはしっかりとパンを作ってね? 経営やばいんだから。じゃないと……. ゲーム禁止にするよ!」
これ効いたのかどうか、姉さんの表情が変わった。

「貴様、私のゲームを取り上げるつもりか? そんなことをしてみろ。した瞬間貴様の首を…….」

言い終える前に「はいはい」と言って優奈が流してくれた。完全厨二病だよ姉さん。

「でも、ちゃんと姉さんが考えて経営が安定すれば、ゲーム買えるよ?」

この一言でかなりやる気出した。嬉しい反面悲しくもある。情けない。

「見ている。私が本気になれば経営なんてすぐ右肩上がりだ」

「期待してるよ姉さん」

そう言っつて、今日の仕事は終了。もう10時を過ぎていた。

「優奈。もう遅いから送るよ」

「えっ、いいわよ別に! 平気に決まってるじゃん!」

そこまでして強がらなくても。

「じゃ、外出てみれば?」

言われたとおりに優奈が外へ出る。

辺りは一面真っ暗だった。

かなり優奈が震えていた。だから言ったのに。

「ほらな。行くぞ」

それでも、素直にならないのか、まだ平気と言っている。

「ただ、大丈夫よ！で、でも折角だから一緒に行ってやるわよ！」
素直じゃない奴。オレは苦笑しながら出た。

夜の道は慣れているがさすがに怖かった。いつも以上に暗いし、自転車のブレーキ音にも少しビクつとする。優奈はそれ以上の反応をする。

店から優奈の家までは、約15分ほどで着く。

5分程歩いたところで優奈が寄ってきて、手を組んできた。

「なっ、何してんだよ……」

いくら幼馴染とはいえ、オレは思春期まっしぐらの高校生。これでドキドキしないほうがおかしい。

「しょうがないでしょ……怖いんだから」

よほど、辛いのだろうな。あの、悪魔で巨乳美人（といっても遙姉さんほどじゃないが）の優奈が怖がるとは。一応、人間らしい。

手を組んでからどれほど歩いたのだろうか。優奈は、すてすてと早く歩く。

「ゆ、優奈。もう家過ぎてるぞ」

気づいたら優奈の家より500mくらい進んでいた。「知ってるわよ！」と言っただけ。

家の前に送ったところで、オレは帰ろうとする。しっかりと優奈が玄関の前のドアを越えるまで見送る。ドアを開け、こっちを向いて、「ありがとね……送ってくれて」と言っただけでドアを閉めてしまった。素直なところもあるんじゃないか。
オレも家帰って寝よう。

姉さんのゲームもほどほどにさせなきゃ。

いつも通りの日々．．．のはずが!?

いつも通りの朝。窓から朝日が流れ込む。いい朝だ、と思いたかった。だが、衝撃の事件が起きた。

それは．．．．．

オレが姉さんに起こされた事だ。

は?と思う人もいるかもしれないけどこんな事初めてだ。

起こすなら毎日だけど、起こされるなんて．．．

「オイ!起きろ!」と言いなながらフライパンとおたまでガンガンやられては起きるしかない。

朝起きて、テーブルに着くとすぐくしっかりした朝ごはんが用意されていた。しかも、毎朝オレが用意するのだが今日は姉さんが用意してくれた。感激して涙が出そうだ。

さらに、今まで見たこともないパンが用意されている。

「姉さん、これは?」

こう言うと、ふっふっふと笑いをあげた。

「これは、昨日徹夜で考えた新作だ。見ろ!徹夜だからクマができたクマが!」

と言って、強調されても困るんだけどなあ

でも、以前の姉さんからは信じられない行動だ。どんだけゲーム欲しかったんだろう。

用意された新作のパンは5個。正直、朝ごはんとしてはかなり多いがせっかくだから食べよう。

まず、パンダの顔をしたパンを食べた。中に生クリームとクリームが入っていてかなりおいしい。餡子が入ったものもある。

さらに、具がかなりあるピザパンも作っていた。一見普通だが、味は一流。その他にもいろいろおいしいのがあり、全て商品化することにした。

こんなに、おいしいパンを作ってくれてとても嬉しい。今まで、こ

んなに真面目にやったことはなかったのに。

「どうだ？うまいか？」

心配そうに聞いてきた。

「おいしいよ！本当においしい！！全部商品化しちゃおう！」

遙姉さんの顔が満面の笑顔になり、巨乳に顔を押し付けてきた。

「く、苦しいー。死んじゃうよ遙姉さん・・・」

「おっ！すまんすまん」と言って放してくれた。もう少し押し付けられても良かったかななんて。

問題はあと1つ。

どうやってこれを、アピールするかだ。いくらおいしくても存在がわからなければ買う人はいない。そこで、HPを作成したり、町にチラシを配ったりして存在を見せ付けた。

そのおかげで、とんでもないほど売れて今となっては毎日客がたくさん来る。以前のように、姉さんや優奈目当てで来る人は少なくなつたのが嬉しい。

かなり売れたので、今では経営も安泰だ。やっと右肩上がりした。だが、覚えていたのか「新作の、モンスターファンタジープラネットを買ってこい」と言われた。だから、店の金は増えてもオレの財布はすっからかんだ。あんな約束しなければよかった。

だけど、そのおかげで姉さんが真面目に取り組んでくれた。それだつたら安いものだ。

まあ、こんなんで気づいたらもう夏だった。

いつも通りの日々……のはずが!?

夏休み。それは普通の高校生なら遊んだり、部活で過ごすだろう。

オレみたいに家業をする高校生はどれほどいるのだろうか。別に嫌ではない。むしろ楽しい。だけど、さすがにオレでも遊びたいと思うときはある。せめて、1日だけでも皆と楽しく過ごしたい。それを、思い切って姉さんに伝えてみた。

「いいよ」の一言で終わった。

「えっ?店はどうするの?」

「そんなの私に任せときな。高校生は遊べ」

驚いた。まさかこんなに簡単に了承してもらえらるとは。でも、姉さんが仕事してオレが遊ぶのは何か申し訳ない気がする。ん?まさか、遙姉さんはこの気にゲームする気じゃ……。顔がめっちゃニヤけていた……。

「姉さん!ゲームはほどほどにね!」

わかってるよ、と言って自分の部屋へ去っていった。

オレも学校へ行こう。

教室に入ると、「和也君!」と言う声が聞こえた。

「なんだよ。また優奈か……?」

振り返ると、茶色いショートヘアの女の子が立っていた。少なくとも優奈ではなくこの人物は優奈の親友の川崎恵がいた。

「なんだ。恵か。何か用か?」

恵は、ちよつと顔を赤くして言った。

「あの……その……」

こんな感じで沈黙のまま。

そこに、優奈が現れた。

「早く言っちゃいなさいよ」

優奈はニヤけながら言う。

「和也君は夏休み空いてるかな？」

驚いた。これが運命と言うやつか。さっき、休みをゲットしてすぐに用事ができるとは。

「少しだつたら空いてるよ」

「じゃ、その．．．海にでも行かない？」

海？これはヤバいだろ．．．オレは思春期だぞ。女の水着なんて見たら．．．

この考えを見通したのか、優奈がこう言った。

「恵一人で行かせるわけにはいかないわ。私も行くから」

別に着いていきたいわけじゃないんだからねッ、と付け足してね。そこへ後ろから、祐樹が現れた。

「お前も行きたいくせに」

ば、ばか、んなこと言ったら．．．

「死んで生き返ってまた死ね！！！！」

踵落しがキレイに決まる。

やっぱりこうなると思ったよ．．．

地面に這いずりながら祐樹が言った。

「オレ達も行くぞ．．．」

そう言ったら、体つきのいい男が出てきた。

「俺たちも暇だな。男三人というのもアレだしな」

もうオレは入ってることになってるのか。

この男は、笹川大輔。

空手と柔道を嗜む、武道男だ。

でも、心は優しくオレの親友でもある。

「ちょっとアンタ達！勝手に決めないでよね！！」

そんな怒ることでもないだろうに．．．

「なあ、コイツらも一緒じゃダメか？男一人つてのもアレだしさ」
そう言ったら恵も共感してくれた。

「そうだよ！人数多いほうが楽しいし！」

二人に言われ、仕方なくと言う感じだが優奈もOKした。しかし、優奈は、

「でもさ、男3人女2人よ？これじゃ人数合わないじゃない」
誰か、誘えそうな人を考えてみる。
頭に浮かんだのは紫苑先輩だった。

あれから、何度かお礼に行き今では結構仲がいい。それに、あの人は後輩から慕われている最高の先輩だった。

「もう一人はさ、先輩でもいいのか？」

この言葉に、優奈と恵は驚いた。

「誰なのよ！」

「紫苑先輩」

もつと驚かれた。というより仲がいいことに驚かれた。

「コイツはついに先輩にまで手を出すか。この裏切り者オ！」

この一言から、優奈がキレてオレのほうに寄る。

「和也ーーーーー！！！」

「ち、違うって今のは祐樹の嘘で……」

なんて言ってるうちに優奈のパンチで吹っ飛ぶ。

「まあ、許してやってくれ。祐樹は和也に嫉妬しているのだ」
してねーよ！と祐樹は言うがな。

いつも通りの日々……のはずが!?

オレは、放課後保健室へ向かった。

ドアを開け失礼しますと言うと、そこには紫苑先輩がいた。

「こんにちは桜井先輩」オレはどうしても本人の前だと苗字で呼んでしまう。

「紫苑でいいですよ」

にこつとしながら言ってくれた。

「は、はい！紫苑先輩」

ちよつと真面目そうな顔になり、オレに質問をしてきた。

「今日はどうしたのですか？何か悪いところでも？」

「いえ。まだこの間のお礼をしてませんし、もしよろしければ夏休みに海へ行きませんか？」

紫苑先輩の顔が晴れ晴れとした。

「まあ！嬉しいです！ぜひ行きたいです！」

よかった、と思っていたらいきなり紫苑先輩が顔を近づけてきた。

「せ、先輩……？」

な、な、なんだこりゃー！！危険、危険すぎー！！

顔と顔の距離がもうほとんどない。このままキス…….と思っていた。これ、どう見ても現実じゃねー、ゲームかゲーム？いや、夢？やばい、落ち着けー落ち着け。

「くまたん」

へ？

「くまたん！」

オレの制服のピンを指差して言った。

制服のピンがこれしかなくてくまのやつを付けている。

いきなり紫苑先輩が抱きついてきた。

「ちよつ、ちよつと！先輩！落ち着いてください！！」

しかし、何を言っても「くまたんだあ〜」としか返ってこなかった。

こんなところを誰かに見られたら．．．
そう思っていたらいきなりドアが開いた。
優奈が入ってきてしまった。

沈黙が流れ、優奈はふるふる震えている。

「こ、この馬鹿和也ー！！！死んで生き返って死んで生き返って死
んじゃえー！！！」

何発もパンチされオレは気を失った。

起きてから事情を説明し、何とか納得してもらえた。だけど、「紛
らわしいのよ！」と若干まだ怒っている。

そして紫苑先輩は極度のくま好きらしい。くまを見るともう一人の
自分が出るとかどうとか．．．

まあ、なんだかんだで一件落着。

いつも通りの日々……のはずが!?

行くのは、オレ、祐樹、大輔、優奈、恵、紫苑先輩の6人だと思っていた。しかし、結局的には紫苑先輩が2年生一人というのはちょっと、という事なので紫苑先輩の同級生の零条茜先輩も来ることになった。しかも、その茜先輩は紫苑先輩と正反対の性格の持ち主で、超明るくかなり男っぽい感じの人だった。まあ、男勝りなら遙姉さんも負けてないけど。

行く場所は、沖縄まで行くこととなった。ちょっと遠いし大変そうだが、楽しめればいいや。行く前に、優奈にはバイト代を渡しておいた。中々貰ってはくれなかったが、姉さんの恐怖により貰ってくれた。最近は客も安定してるのですこしくらいなら贅沢をしても平気だ。だけど、あまり贅沢する気には慣れなかった。姉さんが待っているから。

そして夏休み前日。

「明日から沖縄かあゝ5日間の旅!あつちで限定フィギュア買いまくってやるぜ!」

祐樹の声が廊下に響き渡る。オレは他人のふりをした。

「そんなもの秋原葉行けば買えるだろう」

大輔の言っていることは正しい。けど「秋原葉」じゃなくて「秋原」な……。

一方、優奈は、かなり張り切っていた。和也と近づけるチャンスなんてめつたにないんだから。

そして、二人きりでラブラブになんて考えていた。

「でも、恵も和也のこと好きなのよね……」

ライバル出現は正直親友とはいえ切なかった。それに、協力すると言ってしまったから協力しなければ

ならない。こういうときに自分の素直じゃないところを責める。

恵のほうも複雑な心境だった。

絶対、優奈は和也君のこと好き。そう思っていた。なのに、わかっているのに協力してなんて言ってしまった自分が恥ずかしいし最低だ。

「私、最低だなあ．．．」

言わなきゃ、と優奈と恵はどっちも思っていた。自分の気持ちをはっきり伝えて堂々と戦う。それが大事なのに、中々言い出せなかった。

放課後の帰り道、優奈と恵は偶然出会った。

「あのね！話があるの」

思いつきり被った。二人ともはいどーぞ、と言ったがどっちも言わない。

「は、早く恵からいいなさいよ」

「優奈から言つてよ」

こんな感じのやり取りで30分経過。

もう埒があかないと思ったのか優奈から口を開いた。

「あ、あのね、こないだ．．．協力するって言っただでしょ？私、和也のこと好きだからできない！ホントごめんなさい！」

でも、友達でいて欲しい、と泣きながら優奈は言った。

「当たり前でしょ。わかってるよ和也君の事好きなのは。こっちこそわかって言っただ。最低だよ。こっちこそごめんなさい」

「いいの悪いのは私のほうだから！」

「ううん！悪いのは私」

「私って言つてんでしょ！」

「うるさい！！悪いのは私なの！！」

そこに偶然通りかかったオレは二人の口げんかを見つけて、「オイ、やめろ！」と言ったら「うるさい！！」「と口をそろえ言われ、二人の強烈なパンチを食らった。

オレが何をしたんだ．．．。

優奈と恵は、ライバルであり親友であり。

二人とも、笑顔で帰っていった。
オレだけ、苦しそうだが・・・。

いつも通りの日々……のはずが!?

時は遡り、場所は保健室。

中にいるのは紫苑と茜。

「紫苑が認めるなんて、そうとう面白い子なんだあ〜」
茜が笑いながら言った。

「うん。すごく優しくて面白いよ。」
じーっと茜が紫苑を見つめ、聞いてみる。

「もしかして、紫苑ってその和也って子好きなんじゃないのー?」
すると一瞬で顔が赤くなり、動揺する。

「ななな、何言ってるの!そそそ、そんな事……」
あははは、と笑う茜。

「やっぱりね〜分かつちやったあ〜」
「内緒にしてよ……」

わかってるって、っと言って肩を思いっきり叩いた。

「でも、そんない子ならアタシがとっちやおうかな」
それ聞いた瞬間に、紫苑が立ち上がり、

「絶対ダメ!!!許さない!!!」
「やっぱ、好きなんだあ〜可愛いねえ〜」

冗談ということに気づいて本気になった自分が恥ずかしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464z/>

甘くて苦い少女たち

2011年12月23日03時46分発行